

紅
梅

目次

序・九年母主宰 五十嵐 哲也	2
運命 平成四年～七年	5
松手入 平成八年～十一年	25
紅梅 平成十二年～十五年	65
花衣 平成十六年～十九年	99
名月 平成二十年～二十三年	143
あとがき	192

この度、栗本容子様が句集を出されますことご同慶の至りです。

継続は力なりと申しますが、何歳から始めても俳句は休まず作っておれば上達する。栗本容子様もその例になる、六十歳というのは決して早いとはいえないが、六年後の、

枝振りの生き返りたる松手入

堂々たる句に接すると嬉しい。

私の師の高浜虚子は俳句は極楽の文学と唱えた。地獄極楽は死後のあの世のことで、俳句をやっておれば極楽に行ける。念仏を唱えると成仏出来るといふ話と重ねてみたら面白くない、説得力もない。極楽はこの世にもあり、俳句に熱中しているといふの間にか極楽に踏み入れるという教と私は思っている。容子様も極楽へ踏み入って下さい。

私の選んだ好きな句

帯解けばひとひら落ちぬ花衣

更けゆきて名月雲を払ひたる
花ミモザ空の青さを深めけり
残暑とは言へぬ暑さや雨を恋ふ
限られし命の声を蟬しぐれ
朽ちるまで姿勢崩さぬ石露の花
坪庭のほのと黄灯す石露の花
木の芽風山々の木々目覚めさす
老木の咲き満つ花に齢なく
句に托す余生の安らぎ去年今年

句集を出しても今まで通り、こつこつ句作を続けて下さい。

平成二十三年八月

九年母主宰 五十嵐 哲也

小春日や釣舟賑はふ明石浦

闇深かしライトアップの紅葉かな

歩を止める径の彩いろどり散る紅葉

舞
い
落
つ
る
紅
葉
足
元
彩いろど
り
て

短
日
の
夕
陽
吸
ひ
込
む
水
平
線

冬
枯
の
狭
庭
篋かけひ
の
音
も
絶
え

貼替へし障子の白き座敷統べ

京の路地奥へ導く石路の花

坪庭のほのと黄灯す石路の花

つくばいに紅葉ひと一ひら彩いろ浮かす

太陽に甘味をもらふ吊し柿

千号を讃へ念入り読む夜長

一千号記念俳句特選に入る

平成二十三年

何時しかに八十路となりし初御空

初暦未知の月日の幕が開^あく

喜悲秘めて願ひそれぞれ初詣

寒月やしじまに響く靴の音

絮わた守りて姿勢崩さぬ石路の茎

陽に透きし臘梅香り高めをり

月光に気品極める
白水仙

青天に紅梅彩いろを
広げゆく

音もなく木の芽
いたはる如き雨

木の芽風山々の木々目覚めさす

青空を染めんばかりにミモザの黄

新樹光池にちりばめ鯉はねる